2023年度 関西学院幼稚園 学校評価を終えて

関西学院では、幼稚園から大学院まで連なる総合学園である強みを活かし、お互いに連携をとりながら整合性のとれた学校評価を実施しています。併設する学校の教員に、専門的な視点からの意見を聞くことで、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。この度、関西学院幼稚園の学校評価が、学院総合企画会議（短大・各学校内部質保証部会）において承認されましたので公表いたします。

関西学院幼稚園は、子どもを中心に考えたキリスト教主義による幼児教育・保育を実践しています。そこで、2023年度の学校評価におきましても、関西学院のスクールモットー “Mastery for Service”についての質問を、「学院共通項目」として、そして「キリスト教主義教育」を評価項目に選定しました。また、文部科学省の「幼稚園における学校評価ガイドライン」に沿った項目としては、「教育課程・指導」「教育環境整備」「保護者との連携」「安全管理」を設定しました。

評価の実施に当たっては、各項目について保護者・教員にアンケート調査を行い、関西学院大学教育学部教員、聖和短期大学教員による保育実践・施設の参観、意見を聞くことによって客観性を確保しました。アンケートの回収率は、保護者90.9%（189人/208人中）、教諭100.0%（14人/14人中）となっております。

今年度は、「教育理念・使命・目標」「評価項目」を説明し、各評価項目で「目標」を立て、「具体的な取組の状況とその効果に対する評価」を行い、「今後の方策」を示し、自己点検・評価としました。また、関西学院大学教育学部教員、聖和短期大学教員の評価者に普段の保育を参観していただき、ありのままの本園の教育を知っていただき、その方々のご意見も合わせて関西学院幼稚園の学校評価としてまとめています。
関西学院幼稚園は学校評価を通じて、自らその課題を探り、その課題に向き合い、誠実に対応し、より質の高い保育を目指していきます。

今後も子どもたち一人ひとりが、幼稚園という場所で「愛の中で生きている、生かされていると実感すること」つまり愛されている自分を実感し、友だち・教員と共に認め合い、力を合わせることの楽しさ、喜びを味わうプロセスを大切にするキリスト教主義による幼児教育・保育の研鑽に努め、保護者・学校関係者・地域の皆様と共に連携しながら、より良いキリスト教主義による幼児教育・保育の実践を行いたいと考えております。今後もどうぞよろしくお願いいたします。

2024年3月15日
関西学院幼稚園
園長　赤木　敏之

学校評価

教育理念・使命・目標

＜建学の精神＞
　聖書に示された世界観・教育観・子ども観をもって、キリスト教主義による教育・保育を実践している。子どもたち一人ひとりは、神様に愛されている存在として、慈しみ育てることを使命としている。子どもを中心に据えた教育・保育は、一貫した流れの中で受け継がれている。
＜教育方針＞
〇子ども一人ひとりが、イエス・キリストによって示された神様の愛に気づき、自らがかけがえのない存在であることを知り、喜びと感謝をもって過ごす。
〇お互いの個性や多様性を認め合い、自主性、創造性を発揮して共に育ちあう。
〇神様の創造された自然の中で心と体を存分に使って遊び、健康的な心身を育み、豊かな感性を培う。
　これらの教育方針に基づいて、教員は神、イエス・キリストとの交わりによって支えられ、意図的、継続的、反省的な努力、配慮をもって子どもたちと共に学び、成長する存在でありたいと願って保育を行っている。また、遊びを中心とした保育を実践し、子どもたちの心の育ちを支え導く援助を心掛けている。

2023 年度の評価項目

・キリスト教主義教育→ 本園の教育の根幹となるため毎年の評価項目に選定。
・教育課程・指導→ 重要項目であり、経年変化を図るため毎年の評価項目に選定。
・教育環境整備→ 園児が遊びを通して学ぶ空間としての環境は重要であるため毎年の評価項目に選定。
・保護者との連携→ 園児の健やかな育ちのためには保護者との連携は不可欠であるため毎年の評価項目に選定。
・安全管理→園児の安全対策をとりつつ行う教育の充実のため、評価項目に選定。

2023 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育 【キリスト教主義教育の理念の共有、キリスト教主義教育の根幹である愛情を感じられる教育の実践】	自己評価	A
目標	〇教員間でキリスト教主義教育の理念の共通理解に努める 〇園児の発達・個性を把握して、一人ひとりが愛されていると感じられる保育をする 〇園児が自分と他者との違いを知り、理解し合い、「共に生きる」ことを学べる保育をする		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ・教員は、神様から命・個性を与えられている園児一人ひとりのあるがままを受け止め、愛情を持ってキリスト教主義教育・保育を行っている。 ・教員は、園児一人ひとりが遊びや活動を通して、お互いの個性や違いを知り、それぞれの多様性を認め合いながら共に育つことができるように働きかけている。 ・園児が自分のことだけではなく、周りの友達や家族、他者を思う関わりを大切に考えられるように必要に応じて対話をし、関西学院のスクールモットー		

	“Mastery for Service”の基礎となる教育を大切にしている。 ・教員は、園児一人ひとりの個性や発達を理解し、様々な遊びや活動に主体的に、喜びをもって取り組めるように援助を行っている。 ・教員は、園児の成長を捉える際に「できる・できない」といった目に見える評価や結果だけに捉われず、意欲や達成感、満足感、葛藤といった心の変化や内面の動きに目を向け、その過程を大切に見守りながら援助をしている。 ・日々、保育の中で各クラスで礼拝を行っている。身近な自然物や自然現象の話題から、神様の守りや、与えてくださる恵みに気がつき、喜びと感謝をもてるように祈る時を大切にしている。また、欠席の友だちのことをはじめ、家族や他者を思って祈る時を大切にしている。 ・保護者にも礼拝の内容や、幼稚園で大切にしたいこと、園児と共に考え話し合ったことなどが伝わるように、降園時の伝達や配布物より理解が深めていけるように努めている。 ・土曜日には各学年ごとに保育室やホール、隣接する西宮聖和キャンパス内にあるダッドレーチャペルを使用して礼拝を月 2 回(年間を通して年少組 18 回、年中組 19 回、年長組 19 回)行っている。聖書の話を聞き、さんびかを歌い、献金を捧げ、共に祈る時間をもっている。平日には、年長組は学年で集まり、年中組・年少組は各クラスで聖書の話を聞く礼拝を行っている。 ・各家庭より花を持ち寄り、花の日礼拝を行った。年長組はホールにて、年中組・年少組は隣接する西宮聖和キャンパス内にあるメアリーイザベラランバスチャペルを使用し、園児と保護者、教員と共に礼拝ができた。収穫感謝礼拝では、各家庭より果物を持ち寄り、年長組はホールを使用し、年中組・年少組は各クラスにて礼拝を行った。また、持ち寄った花や果物を、日頃お世話になって支えていただいている法人の教職員の方々へ届ける機会をもち、神様から与えられている恵みや喜びを分かち合い、共有するときとなった。 ・新型コロナウイルス感染状況に留意し、礼拝の内容や保護者・小学生の参加の仕方などを考慮していたが、5 類に移行したことも鑑みて、5 月 20 日より年長組の礼拝に小学生(卒園児)も参加し、共に礼拝をしている。 ・11 月には、講師に関西学院宗教総主事の打樋啓史先生(社会学部社会学科教授)を招聘し、クリスマス準備保護者会の機会を設けた。年少組保護者は当日参加の対面で、年中組・年長組保護者は後日にビデオ視聴で参加ができるように日を設けた。 ・クリスマスには、年長組が中心になりページェント(聖劇)による礼拝をした。3 日間に分けてクリスマス礼拝を行い、年長組・年中組・年少組・保護者・法人関係者・来賓の方々と共にイエス・キリストのご降誕を祝い、祈るときをもった。保護者の方に、クリスマスについての理解を深めてもらう機会となった。 ・花の日礼拝以外にも、年長組保護者が参加できる土曜日の礼拝の日を設けて(三学期に各クラス一回ずつ)、共に祈る機会をもった。 ・1 月には、阪神淡路大震災から 29 年が経ったことを覚えて礼拝を行った。年長組はホールを使用し、年中組・年少組は各クラスで礼拝をし、保護者もホールでの礼拝に参加していただいた。被災された方々のことを思い、命の大切さについて考え、共に祈る時を持った。保護者へも防災・減災の意識をもっていただく機会となった。 ・教員は、毎朝に祈祷会を行い、賛美と祈りとをもって働きを始めている。共に賛美し、祈る中で、キリスト教主義教育の理解・共有につながることを願い、祈祷会の時間を大切にしている。 ・キリスト教保育連盟の刊行物「ともに育つ」を保護者に配布し、キリスト教主

	義教育の理解を深められるようにした。また、今年度は本園の教員が執筆をしたこともあり、より多くの保護者の方が拝読され、キリスト教主義教育に親しむ機会となった。 ・教員の学びとキリスト教主義教育の理解を深めるために、キリスト教保育連盟から刊行されている「キリスト教保育」を年間購読し、全教員に配布した。 **（取組の効果に対する評価）** ・保護者アンケートからは、問 1「幼稚園はキリスト教主義教育の考え方を保護者と共有している(日々の保育の伝達、礼拝、保護者会、手紙等)」について、「強くそう思う」が 82.0%となり、「どちらかといえばそう思う」の 18.0%を合計すると 100%となった。全保護者が肯定的に受け止めており、今年度も引き続きキリスト教主義教育の理解につながるよう保護者への働きかけの取組が結果へとつながったと言える。 ・保護者アンケートの問 2「幼稚園は、子どもたち一人ひとりを受け止めて保育をしている」について、「強くそう思う」が 76.7%となり、「どちらかといえばそう思う」が 21.2%であった。また、保護者アンケートの問 3「幼稚園は、友だち同士が認め合い、力を合わせる楽しさ、喜びを味わうまでの「プロセス」を大切に保育をしている」では、「強くそう思う」が 73.5%、「どちらかといえばそう思う」が 23.3%であった。幼稚園が、一人ひとりの育ちを受け止め、寄り添い、集団生活での育ちのプロセスを大切にしていることに概ね理解・共感が得られていると考えられる。しかし、問 2・問 3 共に、「強くそう思う」が減少したこと、「そう思わない」が 0.5%あったことを覚えていかなければいけない。 ・昨年度の教員アンケートの結果より、今年度はより新しい構成員で保育や援助の省察を各クラスや学年、全体で共有し、また、教員のキリスト教主義教育に関する共通理解を深めていけるように努めてきた。その結果、教員アンケートの問 1「教員は、キリスト教主義教育の理念を共有している」では、「強くそう思う」が 71.4%となった。「どちらかといえばそう思う」の 28.6%を合計すると、100%となった。しかし、教員アンケートの問 3「幼稚園は、友だち同士が認め合い、力を合わせる楽しさ、喜びを味わうまでの「プロセス」を大切に保育をしている」では、「強くそう思う」が 71.4%、「どちらかといえばそう思う」が 28.6%と肯定的な回答が多かったが、強くそう思う教員の数が減少したことを忘れてはいけない。一人ひとりの発達や個性、集団の中での育ちへの援助内容の共有・共通理解がより十分にできるように配慮が必要であったと考えられる。
今後の方策	・引き続き、保護者のキリスト教主義教育の理解を得られるように、家庭通信(園児の姿・園として大事にしている視点等)やお知らせボード、園児連絡アプリ、Instagram の活用(保育の記録や動画配信含む)していく。 ・園児一人ひとりが愛情を感じられるような保育を教員全員で行っている様子や、園児の発達や個性、育ちに寄り添って援助を考えて保育をしている点、集団生活での育ちのプロセスを大事に保育をしていることがより保護者に伝わるように、引き続き毎日の保護者との対話を丁寧に行い、共に子どものことについて考えていく。 ・引き続き、教員で聖書や保育冊子「キリスト教保育」を読む機会をもち、大事にすべきキリスト教の子ども観を確認する。また、研修に参加し、キリスト教主義教育を実践している園の教員との情報交換を通して本園の教育理念や保育実践を多角的に捉えて話し合う機会を大切にしていく。 ・教員で園児の発達や個性、育ちへの援助等を共有・共通理解をしていけるよう

	に、必要に応じてクラス・学年・全体での省察を引き続き大事にしていく。教員が作り出す幼稚園の雰囲気や、立ち振る舞い方、園児への関わり方等、幼稚園の大事にしている部分を確認し合う機会をもっていく。

評価項目 【テーマ】	教育課程・指導 【各領域に主体的に取組む姿勢を培う援助】	自己評価	B
目標	○園児が自律的な精神を養い、何事においても意欲的に取り組めるように援助する ○園児が集団の中で、互いに違いに気づき、理解し合えるように援助する。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ・教員は年間指導計画、学年毎の月案、クラス毎の週案、個人記録、日案について、園児一人ひとりの発達段階や育ちなどを考察、省察している。 ・教員は、園児の育ちが個々から集団へと繋がることを願い、子どもたちの育ちに合わせた援助や、クラス全体での活動に意欲的に取り組めるようにしている。また、保護者と連携することにも重点を置き、家庭でも意欲や主体性に繋がるようにしている。 ・教員は日々、園児の姿を保護者と共有するために、降園時や懇談会において園での取組やねらい、活動、それらに付随した願いを伝えている。また、保護者の考えや願いを踏まえ、より具体的に園児が集団生活を過ごす中で育まれる力や成長、変化などを共有している。 ・教員は、それぞれの個性を受け止め、園児が互いの違いに気付き、理解し合い、認め合い、友だちや教員と共に過ごす喜びや安心感もてるように支えている。 ・教員は年齢や発達に合った教材を年度毎に、熟考して準備し、園児が自主的、意欲的に物的環境に関われるようにしている。また、教員は人的環境として、園児が興味関心を深め主体的に活動を展開していけるように一人ひとりの育ちに合わせた援助を行っている。 ・日々、園児一人ひとりの姿や育ちについて教員間で話し合い、成長が積み上がっていくように努めている。また、各学年の活動について、ねらいや発達、経験などを省察し、教員の会議で共有して連携している。年度末には個人の育ちや願いを引き継ぎ共有している。 ・意識的に教員間で話し合い考えあう機会を持ち、話し合うことを大切にしている。そのことが結果的に子どもの育ちや成長に繋がると考えている。 ・月１回の園内研修を行い、視野を広げ教員自身が学ぶことを大事にしている。 （取組の効果に対する評価） ・保護者アンケートからは、問 5「幼稚園は、子どもたちの育ちに応じた保育プログラムを実践し、個人に添った援助を行っている」に「強くそう思う」と答えたのが 62.4%、「どちらかといえばそう思う」と答えたのが、34.4%となった。日々の保育の中で、皆が意欲的に取り組めるように一人ひとりの発達や状況を考慮した援助を行えるよう、保育内容を教員同士で様々な意見を出し合っていることが肯定的な評価につながっている。 ・教員アンケートからは、問 4「幼稚園は、園児一人ひとりの興味・関心を高め、主体的・意欲的に活動できるように保育をしている」に、「強くそう思う」の回答が 78.6%、「どちらかといえばそう思う」が 21.4%となった。また、問 5「幼稚園は、園児の育ちに応じた保育プログラムを実施し、個人に沿った援助を行っている。」に関しては「強くそう思う」の回答が 71.4%、「どちらかといえばそう思う」が 28.6%となった。これらの結果は、日々の保育後に考えを伝え合ったり、話し合うことを習慣化できるようにそれぞれが意識していることが結		

	果として表れていると考える。 ・教員アンケートの問 9「幼稚園は、教員の教育・研究の為の環境（学会・研修会への参加も含む）づくりに努めている」には、「強くそう思う」の回答が 50.0%、「どちらかといえばそう思う」が 28.6%となった。しかし、「あまりそう思わない」が 21.4%の結果も忘れてはならない。
今後の方策	・子どもたちの様子を保護者が直接目にする機会がコロナも落ち着きを見せ始め従来の形に戻りつつあることで増えたことが、保護者からの評価に大きく作用していると考えられる。引き続き、保護者が参観できる機会や場を設けることを積極的に考えていく。 ・教員は日々、保育と向き合いながら月一回の園内研修も行われているが、学びたい内容が一致せず満たされていないことも考えられる。実りある時間となるように教員間で、研修内容について話し合う場も設けることを検討していく。

評価項目 【テーマ】	教育環境整備 【設備整備、遊具・教材の充実、教員の教育・ 研究環境の整備】	自己評価	B
目標	○法人と連携した設備整備の安全、維持管理、充実のための点検、整備、拡充を行う ○法人と連携して園児の育ちに適した遊具、教材の充実を行う ○教員の教育、研究のための環境の充実を行う		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ・園児の活動の充実の為、様々なハーブ（ラベンダー、ミント、ローズマリー、レモンバーム等）、パンジーとビオラを栽培し、保育室・デッキなどには季節の花々を飾っている（ベゴニア、ゼラニウム、シクラメン、ポインセチア等）。また、園児が、植物の生長を身近に感じたり、栽培した野菜を収穫して食したりできるように、各学年で植物を栽培している。時期が過ぎたものや園庭の花、果実、葉などをおろしたり、つぶしたり、ちぎったりし、五感を使う遊びとして使用している。 年少組）つるなしインゲン 年中組）ナス、ピーマン、フウセンカズラ 年長組）ヒマワリ、ナス、ヘチマ 全学年）チューリップ、ヒヤシンス、クロッカス、カブ、ダイコン、ラディッシュ ・自然豊かな園庭の環境維持の為、教員は水やり、追肥、草抜き、間引きを行うと共に教育的配慮を持ちつつ植物の育ちも考慮して、施設課に相談し、樹木の剪定・伐採等をし、環境整備に努めている（年 1～3 回）。 ・園児がより自然に興味関心を持ち生き物の飼育を通して命の尊さが感じられるように各保育室では、生き物を飼育しており、情操教育にもなっている。（アカハライモリ、メダカ、金魚、ヌマエビ、ドジョウ、ザリガニ、 タニシ、カタツムリ、カブトムシなど） ・日本の伝統的行事や季節に応じた装飾をしている。 4、5 月）五月人形、鯉のぼり、カーネーション（母の日） 7 月）七夕（笹飾り） 11、12 月）クリスマスツリー、アドベントカレンダー、クリスマスの窓飾り、リース、アドベントクランツ（12 月には、園児にアドベントカレンダーを配布している） ・毎日ピロティ、デッキ、園庭、保育室、トイレなどの清掃を教員が行っている。		

	・春休み、夏休み、冬休み中などの保育を行っていない時期に、教員で園庭・デッキの木製遊具（小屋 4 棟、トンネル、六角デッキ、雲梯、平行棒、机など）に柿渋塗布（防水防腐防虫）を行っている。また、学期末には各学年で計画して園児、教員で、園庭倉庫内の掃除をしたり、日常的に使っている遊具を洗ったり、保育室のごみを拾うなど、掃除を自主的に行っている。また、園児はデッキや棚の拭き掃除などをする機会ももっている。 ・ホール、職員室、保育室のワックス塗布が行われ（年 1 回）、デッキのワックスがけは教員が行っている（年 2 回）。 ・教員は、園庭の池の環境維持を日々行い、年度当初には園庭にある櫂所（65 か所）の掃除を行っている（泥、砂、落ち葉の除去など）。 ・嫌気性細菌の増殖を防ぐ為、教員で砂場（2 か所）、腐葉土の掘り起こしを行っている（週 1 回）。 ・保育を始める前に毎朝、園庭・遊具の安全確認を行っている。また、随時施設部や聖和キャンパス事務室と連絡をとり、環境の保全に努めている。 ・園児用トイレ（4 か所）を大型改修を行った。 ・修繕箇所）正門、男性用小便器（2 回）、保育室便器（2 回）、保育室お手洗い改装（4 か所）、保育室床（8 か所）、換気扇（2 か所）、トランポリンネット、トンネル、砂場を囲む木板、丸太の壁撤去、ホールのレースカーテンなど ・消防点検（1 回）、屋上点検（7 回）、ガス点検（6 回）、受水槽工事（2 回）、受電設備点検、火災報知器の交換 ・自然環境が豊かな園庭であるため、イラガ、ムカデ、スズメバチなどの危険な虫が見られた際は、園児の安全に配慮し、必要に応じた対応をしている（今年度はハチの巣撤去）。 ・保育で使用する大小様々な段ボールを準備し、ごっこ遊びや劇遊びなど様々な活動に使用できるようにし、子どもの遊びの広がりをもたせ充実させている。また、外遊びの遊具としても使用している。 ・日々の保育で使用する画用紙、モール、ボンド、リボン、テープなど、その都度必要な教材を月に 1 回確認し、購入している。 ・年度当初に、各学年の活動の充実をはかる為、教材・遊具を購入した。 年少組）木製汽車部品、木製ままごと玩具（レジスター、電話など）、パズル、かるた、粘土、スカーフ、ミニカーセットなど 年中組）レゴ基礎版セット、カラースカーフなど 年長組）木製ままごと皿、個人用虫かご、片刃のこぎり、ござなど 外遊び用）おろしき、スプーン、ふるい ・各学年「福音館書店の月刊絵本」（こどものとも 0、1、2）（こどものとも年少版）（こどものとも年中向き）　（こどものとも）（ちいさなかがくのとも）（月刊かがくのとも）（こどものせかい）を定期購入し、かがくのとも「食に親しむ絵本セット」（10 冊）、「手作りお手玉」4 種類計 7 冊、「伝承おりがみ」4 冊セット、折り紙の本 3 冊、」「かみひこうき」4 冊を購入した。 ・各保育室（9 部屋）、ホールのピアノの調律を行った。 ・芋ほりを行う為、「紅はるか」（500 本）、安納芋（30 本）、パープルスイート ロード（30 本）の苗を購入。畑には一部、草の繁茂を防ぐためのシートを張った。親子での苗植え後に、園児・保護者・教員で日々、水やりや草抜きを行い、 サツマイモの栽培の過程を経験し、秋には収穫の喜びを分かち合う機会を持つことができた。 ・クリスマスには、プレゼント製作用材料を教員で検討し、購入した。（木材、リボン、布類、ビーズ類等）　会食用に卓上ポット 12 本を購入した。

	・保育後の時間に教員同士で声を掛け合い、子どもについて、保育について等を話し合い、連携し、保育の質向上に努めている。 ・「令和５年度 私立幼稚園教員子育て支援研修」に参加。 （主催：一般社団法人 兵庫県私立幼稚園協会） 「誕生からの乳幼児の育ちを支える保育者の専門性」 神戸大学大学院教授 北野幸子氏 「保護者と共有、共感する子どもの遊び」玉川大学教授　田澤里喜氏 「幼保小の架け橋プログラム」名古屋学芸大学教授　津金美智子氏 ・園内研修会（月１回）を実施している。 **（取組の効果に対する評価）** ・保護者アンケートでは、問７「幼稚園は、補修・修繕等を含めた教育環境設備の点検、整備を適切に行っている。」に関して、「強くそう思う」が 60.3%、「どちらかといえばそう思う」が 38.1%という結果になった。教員が園庭・デッキ・保育室・遊具の安全を確認し、補修が必要な場合は教員が対処できるところは行い、難しい場合は施設部に報告・連絡した上で修繕等を迅速に行っていることへの評価であるが、達成できたとは言えない。 ・保護者アンケートの問８「幼稚園は、子どもの興味や関心、育ちに応じて遊具・教材を整えている」に関して、75.1%が「強くそう思う」、24.9% が「どちらかといえばそう思う」という結果になった。日頃の保育環境を保護者自身が送迎時やサークル活動時、行事などで目にしており、幼稚園の教育環境に共感していることが窺える。 ・教員アンケートでは、問７「幼稚園は、補修・修繕等を含めた教育環境設備の点検、整備を適切に行っている」に「あまりそう思わない」が 7.1%という結果になった。修繕や改修をしていたとはいえ、経年劣化による木製遊具やデッキ、床などの不具合が毎年あり、長期休暇中でなければ対応できないこともあることが結果に反映しているのかもしれない。 ・教員アンケート問８「幼稚園は、園児の興味や関心、育ちに応じて遊具・教材を整えている」に関して、57.1%が「強くそう思う」、7.1% が「そう思わない」という結果になった。主に担任が各学年、今の子どもたちに何が必要か検討し購入しているが、分担しているがゆえに、その教材をいつなぜ購入したかなどの共通理解を図ることができていないがゆえの結果かもしれない。また担任以外の教員にもどのような教材があったらいいと思うか意見を聞くなど、意見しやすい環境づくりも必要と考える。 ・教員アンケート問９「幼稚園は、教員の教育・研究の為の環境（学会・研修会への参加も含む）づくりに努めている。」に「あまりそう思わない」が 21.4%という結果になった。研修会では子どもや保育に関わる様々な事柄に対して学びを深めている。また、教師会では園児に関する事や日々の保育や行事にまつわることなどが話し合われており、同じ学年に携わる教員においては、月のカリキュラムを元に、保育について共に考え合い、園児の育ちについてもある程度は情報を共有している。一方で他学年の教員や預かり保育担当の教員との情報共有は、短い時間の伝達になったり、預かり保育を担当している教員が会議に参加できず紙媒体での伝達になることがある。園児一人ひとりの育ちに即した保育を行なう上で、より一層の連携をした意識の高さが表れているのではと推測する。
今後の方策	・引き続き、教員による毎日の設備整備の点検を行い、法人や業者との連携を円滑に行う。

	・園児の活動を充実させる為に、担任以外の教員も含めて話し合い、園児に適した遊具・教材を検討し、意図を教職員全体に共有する。 ・教員の勤務形態に違いはあるが、教師会や園内研修などの会議体だけでなく、教員個人が相互に園児について話し合い、育ちや願いを共有する努力をする。

評価項目 【テーマ】	保護者との連携 【保護者との連携の強化】（重点）	自己評価	B
目標	○園の教育方針について理解を深め、園児の心身の健全な発達を願い、家庭との連携を図る ○園児一人ひとりの健康状態を把握し、また疾病予防に努める ○教員の対応できない怪我、疾病等について園医に相談して、最善の対応をする		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ・本園では保護者が登降時に園児の送迎を行うため、教員は保護者と対面して話（日々の園児の体調や家庭での様子、保護者の心配事や相談など）をする機会を持っている。登園時には、長い時間をとることが難しいが、教員は降園後に時間をとったり、電話での相談などにも応じたりして、保護者からのコミュニケーションがとりやすいような環境づくりに配慮している。また、降園時には各クラスで起こった出来事や、園児とした話し合いの内容など、なるべく具体的に保護者が幼稚園での園児の姿を思い浮かべることができるように話をしている。 ・園児一人ひとりの誕生日を全教員で把握し、本園で過ごす時間の中でお祝いの言葉をかけており、園児も保護者も愛されていることを実感し、喜びのときをもてるようにしている。 ・Instagram や園児連絡アプリで園生活の様子や伝達事項などを写真や動画を交えながら発信している。 ・保護者と教員は、互いに園児の心身の発達や今後の成長の見通しや願い等を話し合うために、家庭訪問（年１回）、個人懇談会（年２回）を行い、園児の成長を振り返り、それぞれの保護者に「1 学期のお子様との関わりやご様子の中で、嬉しかったこと」を一言ずつお話しいただくクラス懇談会（年１回）を行っている。また、保護者には、園児の日頃の園での姿を見ていただき。本園への理解を深めていただけるように「保育参観日（学期毎）」の機会を設けている。（但し、年少組に関して一学期は「保育参観日」ではなく「親子登園日」としている。） ・本園の各行事や園児の活動に関わることは、あらかじめ「おたより」を配布しその行事の由来や、なぜそのようなことをするのか等が保護者に事前に伝わるようにしている（母の日・父の日について、花の日礼拝・家族で遊ぼう、夕涼み会、運動会、収穫感謝礼拝・愛餐会、クリスマスについて等）。また、保護者会活動が始まるにあたっての「保護者会総会」や、年長千刈サマーキャンプ前の「年長千刈サマーキャンプ説明会」、クリスマスを迎える上で、本園のアドベント前に「クリスマス準備保護者会」を実施するなど、「おたより」だけでは伝えられないことを対象の保護者に行っている。 ・保護者会総会） 「子どもの思い　親の願い」赤木 敏之園長 クリスマス準備保護者会） 「クリスマスの喜び―みんなが招かれる光の祭り」 打樋 啓史先生（宗教総主事　社会学部社会学科教授） ・新型コロナウイルス感染症が第５類に移行したことにより、今年度は、昨年度		

よりも様々な保護者参加行事が計画、実施されている。
1学期）進級式、入園式、クラス役員選出、保護者会総会、年少親子お弁当参観日、年少親子登園日、年中・年長保育参観日、クラス親睦会、花の日礼拝、」親子でサツマイモ植え、クラス懇談会、夕涼み会、親子で畑の草抜き（夏期休暇中）
2学期）年少バス遠足、親子で芋ほり、運動会、個人懇談会、さんびか練習、クリスマス礼拝・祝会
3学期）阪神淡路大震災を憶えての礼拝（自由参加）、年長保護者自由参加礼拝（自由参加）、卒園式、3学期終了式

・年度当初に「関西学院幼稚園在園児保護者」を会員とする保護者会の役員選出を各クラス話し合いで行い、「会長、副会長、会計、書記、ベルマーク担当者を含む16名」を選出し、保護者会の目的である「園の教育方針について理解を深め、園児の心身の健全な発達を願って園と家庭との連携を図り、協力、後援をして、会員相互の親睦を図ること」を遂行する役員会を設け運営している。
・「保護者会役員会（月1回）」は、役員・園長によって行われている。役員会は礼拝から始まり、保護者会活動についての話し合い（毎回議題あり）がもたれている。
議題）保護者の活動方針・内容、会計について、一日サークル、終了日に提供する茶菓、クリスマス会食の手伝い、お餅つきの手伝い、卒園記念品内容検討、各サークルの活動状況について等
・本園の保護者代表として、役員複数名が「西宮市私立幼稚園連合会PTA大会」に参加した。
式典、記念公演「幼児にとっての自然体験の重要性について」
～自然体験の重要性の説明・自然体験をするためのコツ・自然体験提供者にとって必要な3つの視点（長谷部 雅一氏）
・保護者会活動の一環として、保護者の方の楽しく充実した活動が、子どもたちへのより良い育ちにつながるようにサークル活動が行われている。
通常、行われるサークル活動）
図書、からだを動かす、手芸、木のパズル、コーラス、音楽
一日サークル活動）
フラワーアレンジメント
・保護者会の図書サークルでは、絵本の修繕をして園児に還元し、手芸サークルではクリスマスプレゼント作成にあたっての助言を必要な保護者にしていただくなど、それぞれのサークルで園児・幼稚園のためにお働きいただいている。

（取組の効果に対する評価）
・保護者アンケートでは、問9「幼稚園は、日頃から子どもたちの様子を保護者に伝え、また、保護者からの話を聞き、共に子どもの育ちを支えている。」に「強くそう思う」が66.1%、「どちらかといえばそう思う」が27.5%、「あまりそう思わない」が 4.8%、「全くそう思わない」1.6%となった。それに対して、教員アンケートでは、問10「幼稚園は、日頃から園児の様子を保護者に伝え、また、保護者からの話を聞き、共に子どもの育ちを支えている。」に「強くそう思う」が64.3%、「どちらかといえばそう思う」が35.7%となっている。この結果から保護者と教員で多少なりとも差が見られるのは、教員が園児一人ひとりについて保護者と話し合う機会を作る努力をしているものの実際には、保護者や教員それぞれ共有できる時間（勤務時間、家庭環境により）が限られている為、保護者側が十分に満足できていないのではないかと思われる。

	・保護者アンケートの問 10「幼稚園は、子どもたちの心身の健全な発達を願い、保護者と連携を図っている。」に「強くそう思う」が 68.8%、「どちらかといえばそう思う」が 27.5%、「あまりそう思わない」が 3.2%、「全くそう思わない」が 0.5%となり、教員アンケートでは、問 11「幼稚園は、園児の心身の健全な発達を願い、保護者と連携を図っている。」に「強くそう思う」が 71.4%、「どちらかといえばそう思う」に 28.6%となっている。概ね肯定的な回答が多く、このことから保護者、教員相互に、本園が大切にしている保育観や、園児の成長や関わりを通して共通理解を深め、共に園児の育ちを支えていることを実感しているからではないかと思われる。また、今年度の保護者会では役員選出の際にも、積極的に役員を担おうとする方が多く、そのことからも役員を筆頭に保護者全体が、本園に協力しようという姿勢の現れのようにも思える。
今後の方策	・保護者と教員が日常的に話をすることは、信頼関係を育て、コミュニケーションを円滑にとる上で、非常に大切な時である。今後も教員一人ひとりが保護者と直接話すことができる機会を積極的に設けていきたい。また、その際には教員が一方的に園児の話をするのではなく、保護者の声を受け止める意識を持ち続ける。 ・保護者にとって本園で過ごす園児の姿は目の届かない所での出来事であり、園児からもたらされる情報だけでは十分なものとは言えない。保護者の抱えている不安や相談には随時対応する。また、昨年度に引き続いて全ての保護者が園児がどう過ごしているかがわかるように、Instagram や園児連絡アプリを用いて、情報を発信していく。

評価項目 【テーマ】	安全管理 【日常の健康管理、疾病予防の取組、園医との連携による健康管理】	自己評価	A
目標	○園児一人ひとりの健康状態を把握し、また、疾病予防に努める ○教員の対応できない怪我、疾病等について園医に相談して最善の対応をする		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ・毎朝、教員で園庭を見回り、危険箇所がないかを確認し、遊具の安全点検を行っている。 ・毎年度 4 回の避難訓練（火災（室内）・地震（室内・屋外）・預かり保育（地震））を行い、園児だけでなく、保護者にも家庭での防災に対する意識を高めてもらえるように話をしている。 ・無断欠席があった場合には、園児の安否を確認するために幼稚園から保護者に連絡をとり、確認の徹底を行っている。 ・毎年度保護者が記入する園児生活調査票にて、園児一人ひとりの健康状態、持病、身体的特徴、アレルギー、既往歴などを把握し、教職員間で共有し、対応や援助について話し合っている。 ・アレルギー対応者には、園からのおやつ・食事に関して原材料表を配布し、対応を教員全体で把握している。 ・教員は登園時に園児の視診を行い、体調や心の状態の把握に努めている。また保護者からも直接園児の健康状態を確認している。 ・教員は保育中、園児の体調の変化に目を配り、必要に応じて検温を行い、保護者に連絡等を行っている。園児の状態に応じて園医や保健館と連携している。また、早退後の園児の体調について、保護者に連絡をとり、教員で把握している。 ・流行性の疾病などで欠席者増加の兆候が見られた際には、学級閉鎖等の措置に		

	ついて園医に相談の上、保護者の方にも状況を伝えている。 ・新型コロナウイルス感染症の幼稚園の対応（第５類感染症に移行するまで（2023年５月７日まで））については、マスクの着用や出席停止基準、学級閉鎖基準等について保護者に伝えた。第５類感染症への移行後も感染予防のため、手洗い後のペーパータオルの使用、食前の手指消毒、机の消毒、保育室の換気を引き続き行っている。 ・毎年度、園医による健康診断、歯科検診を行っている。また、毎月身体測定を教員により行っている。 ・園医による「ほけんだより」を発行し、保護者に子どもの疾病予防や、健康管理に意識が向けられるような機会を設けている。 ・教員は園医による救急法講習（AED、CPR、エピペン使用法）を受講し、救急時の対応に備えている。 ・教員は園児が「手洗い・うがい」「衣服による体温調節」等、望ましい生活習慣が身につくようにしている。 **（取組の効果に対する評価）** ・以上のような取組を行っているが、保護者アンケートでは、問12「幼稚園は、子どもたちの健康管理、疾病予防に努めている。（園医と連携の上）」に対して54.5%が「強くそう思う」、43.9%が「どちらかといえばそう思う」と答えている。また、教員アンケートの問12「幼稚園は、園児一人ひとりの表情や様子等から体調変化に気づき、把握に努めている。」に対して「強くそう思う」が78.6%、「どちらかといえばそう思う」が21.4%となり、問13「また、怪我、疾病等の対応については園医に相談の上、行っている。」に対して「強くそう思う」が64.3%、「どちらかといえばそう思う」が35.7%となった。ここ数年は新型コロナウイルス感染症の広がりから感染予防に対する意識が高まっており、幼稚園でもアルコール消毒をはじめ、日々の検温、密にならないような行事のあり方等、徹底した感染予防対策を講じてきた。2023年５月に第５類感染症に移行したことによって過度に警戒することが緩和され、幼稚園の対応も少しずつ変化していったことから、保護者からも幼稚園の予防策が見えにくくなったことが原因であると考えられる。
今後の方策	・園児の心身の健康状態について保護者、園医とも連携し、把握に努める。また、教員全体で共有し、園児一人ひとりの体調や心の変化に気づけるようにする。 ・昨年度までは新型コロナウイルス感染症予防に特化した方策が多くあったが、原点に立ち返り、園児一人ひとりの心身の健康に留意する。 ・望ましい生活習慣や健康管理について、引き続き園児にも保護者にも意識できるよう伝える。 ・医療についての知見に関しては教員で判断せず、引き続き園医に指示を仰ぎ、連携して園児の健康を支える。

（自己評価）

A＋=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

総合評価

全ての評価項目において、保護者・教員から肯定的な回答を得た。これは、保護者へのアンケートの質問 13「お子様は、幼稚園で過ごす事を楽しいと感じている。」に「強くそう思う」と答えたのが 77.8%、質問 14「幼稚園の教育・保育に満足している。」に「強くそう思う」と答えた保護者が 76.7%という結果から見て取れる。一方、アンケートのほとんどの項目で、わずかながら、肯定的ではない回答も見受けられることを忘れてはならない。幼稚園の保育や教員との関わりが、園児のみならず、保護者一人ひとりも受容されていることを感じ、信頼感を持って園児を預けられる幼稚園でありたい。

今後、幼稚園が大切にしている、子ども一人ひとりが愛情を感じられる教育の実践を引き続き行うと共に、アンケート結果からも見えてきた改善点を教員全員で共有し、日々の保育に生かしていく。

2023 年度の評価をふまえて 2024 年度に予定している評価項目、テーマ等

・キリスト教主義教育
・教育課程・指導
・教育環境整備
・保護者との連携（重点）
・安全管理

第三者評価／学校関係者評価

全体として、誠実な「自己点検・評価」が行われていることを確認しました。

教育方針や評価項目の各目標に向け、教員が一丸となり工夫をしながら、子どもの育ちを考えた保育が継続されていることが大変評価できます。建学の精神につながるキリスト教主義教育については教員間での共有が十分できており、保護者とも手紙や保育の伝達等により共有できていることがうかがえます。ただし、保護者アンケート（問 2～6）と教員アンケート（問 2～6）を並行して見ると、ごく一部の保護者には保育の取組の中に流れる保育観や教員の配慮等が伝わっていない可能性があります。これに対しては、今後の方策に書かれているように、原因を考察し、保護者との対話を丁寧に行うなど、具体的に対応を考えることが期待されます。教員が毎朝、話し合いや祈りを持って働きを始めるなど、教員間での取組は、「教員が作り出す立ち振る舞い方、園児への関わり方」に現れて、保育のさまざまな場面に反映されていると思われます。実際に視察に伺った時には、各クラスの教員は話し合いの時間を大切にして、丁寧に、幼児一人一人の言葉を尊重している様子が窺われました。今後もキリスト教主義保育に基づく幼児一人一人の育ちに寄り添う実践を期待します。

教育課程・指導・教育環境について、園児の個々の状況や季節に応じた保育内容が様々展開されていることが文面から確認でき、大いに評価できます。視察の中では、教員が園児に情報を一方的に提供するのではなく、園児が自ら自主的、意欲的に考え、活動できるように、さまざま工夫した言葉がけや材料・環境設定がなされていました。まさに現代教育の中で期待される思考力、判断力、表現力の基礎が、関西学院幼稚園の教育課程・指導の中で育まれていると感じました。教員アンケート問 9「幼稚園は、教員の教育・研究の為の環境（学会・研修会への参加も含む）づくりに努めている。」からは、さらなる教員自身の研究の環境・時間の確保の必要性が読み取られました。日常の中で教員の研修や学びの時間をどのように確保するのか、教員同士の共有方法や伝達方法等を話し合い、各教員の研究や課題が共有され、お互いに研究を深めていける工夫が期待されます。

その他、環境や安全管理について、関西学院幼稚園は豊かな自然環境や木材の落ち着いた園内環境がありますので、環境整備やメンテナンスには多くの時間と労力を要すると思われますが、この環境だからこそ、子どもが落ち着いた日常を過ごし、心豊かに表現できるという自然の恵みを教員、保護者と確認、共有しながら保護者の意見も取り入れながらさらに、柔軟に環境を作っていくことを期待します。

安全管理面では子ども達の日常の健康確認や予防として教員の様々な丁寧な取り組み、配慮が文面から分かります。また「ほけんだより」により保護者と共に子どもの健康を見守る姿勢が大いに評価できます。

以上の他、自己評価に書かれていることは実態と適合していると思われますし、それぞれの項目の課題点については、今後の方策のところで考察されているので、それが実現することを期待します。

第三者評価／学校関係者評価

今年度もキリスト教主義教育の精神を中心におき、「一人ひとりが愛されていると感じられる保育」が実践されたことが示されました。「キリスト教主義教育」は過去 3 年にわたって自己評価が「B」でしたが、今年度は「A」評価となりました、保護者、教員ともにキリスト教主義教育の理念への共有が深まったことは大いに評価できます。

3 年間のコロナ禍を経て、今年度は第 5 類感染症への移行により、保育活動が充実したことは大変喜ばしいことでした。幼稚園での生活をとおして、神さまの恵みを感じ、他者を思いやることや感謝する心が育てられていることが具体的な取組に表れています。加えて、関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”の根底にある「心の教育」を大切にした保育が行われていることが教員のアンケート結果からもみてとれます。一方で、保護者アンケートでは、“Mastery for Service”への理解や共感が低い結果となっています。キリスト教主義教育の理念を具体的に示した“Mastery for Service”のモットーを保護者と共有し、幼稚園生活をとおして“Mastery for Service”の基礎を培う教育・保育への理解がさらに深まることを期待します。

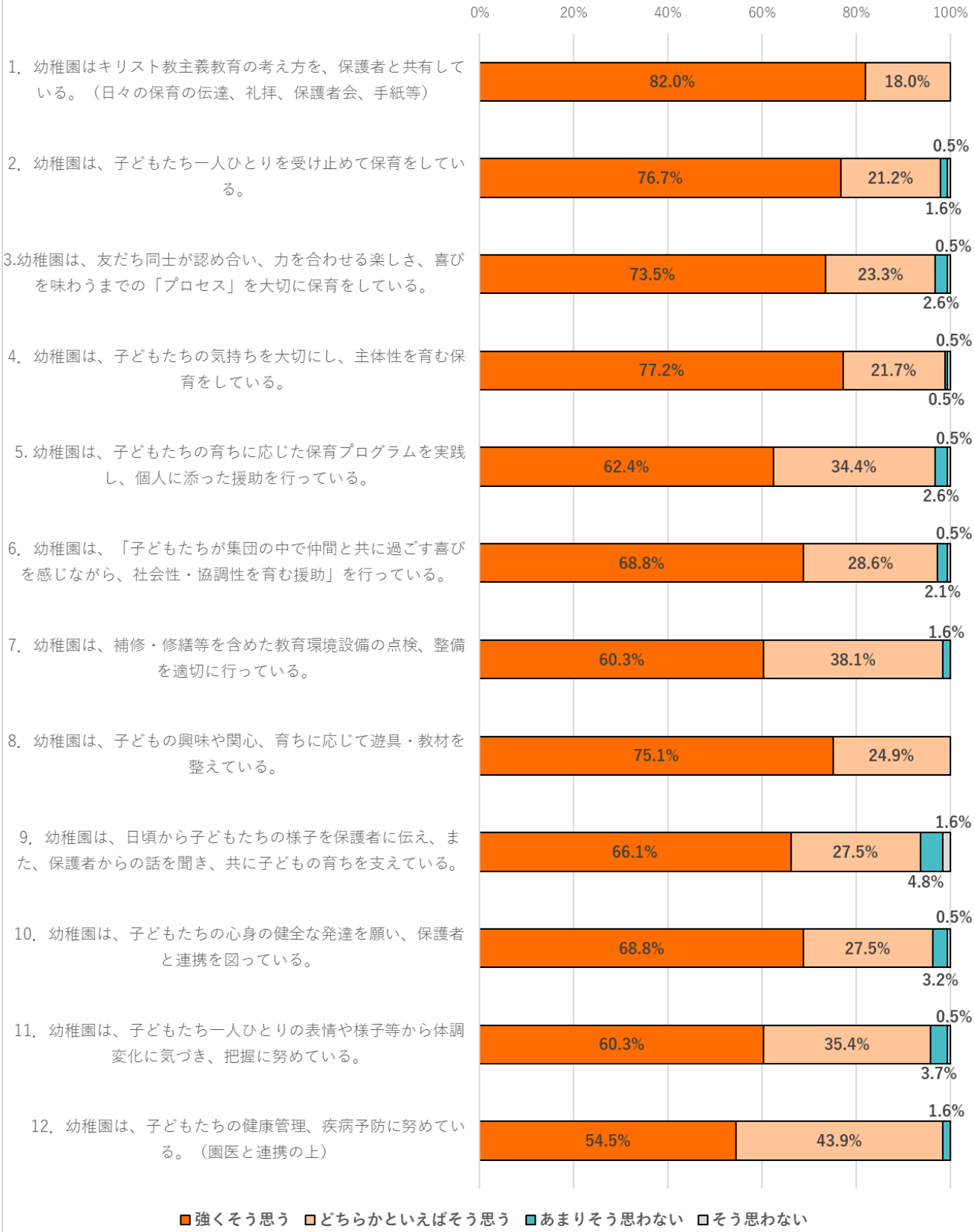
保護者アンケートの問 14「幼稚園の教育・保育に満足している」の肯定的回答は高く、前年度以上の結果となっていることは大変評価できます。「教育環境整備」「安全管理」の内容から、教員が常に子どもの育ちを願いながら、教育・保育活動を支える環境を整えたことがわかりました。法人や園医との連携、教員のきめ細やかな配慮のもと、評価項目の目標を達成するための取組が適切に実施されています。重点項目に設定した「保護者との連携」は、昨年度に引き続き「B」評価でしたが、保護者との日常的な対話を積極的に設け、保護者の思いや考えを受け止めていくことが今後の方策に示されました。保護者とともに保育を創る関西学院幼稚園の伝統的な取組が、保護者の満足度につながることを期待します。

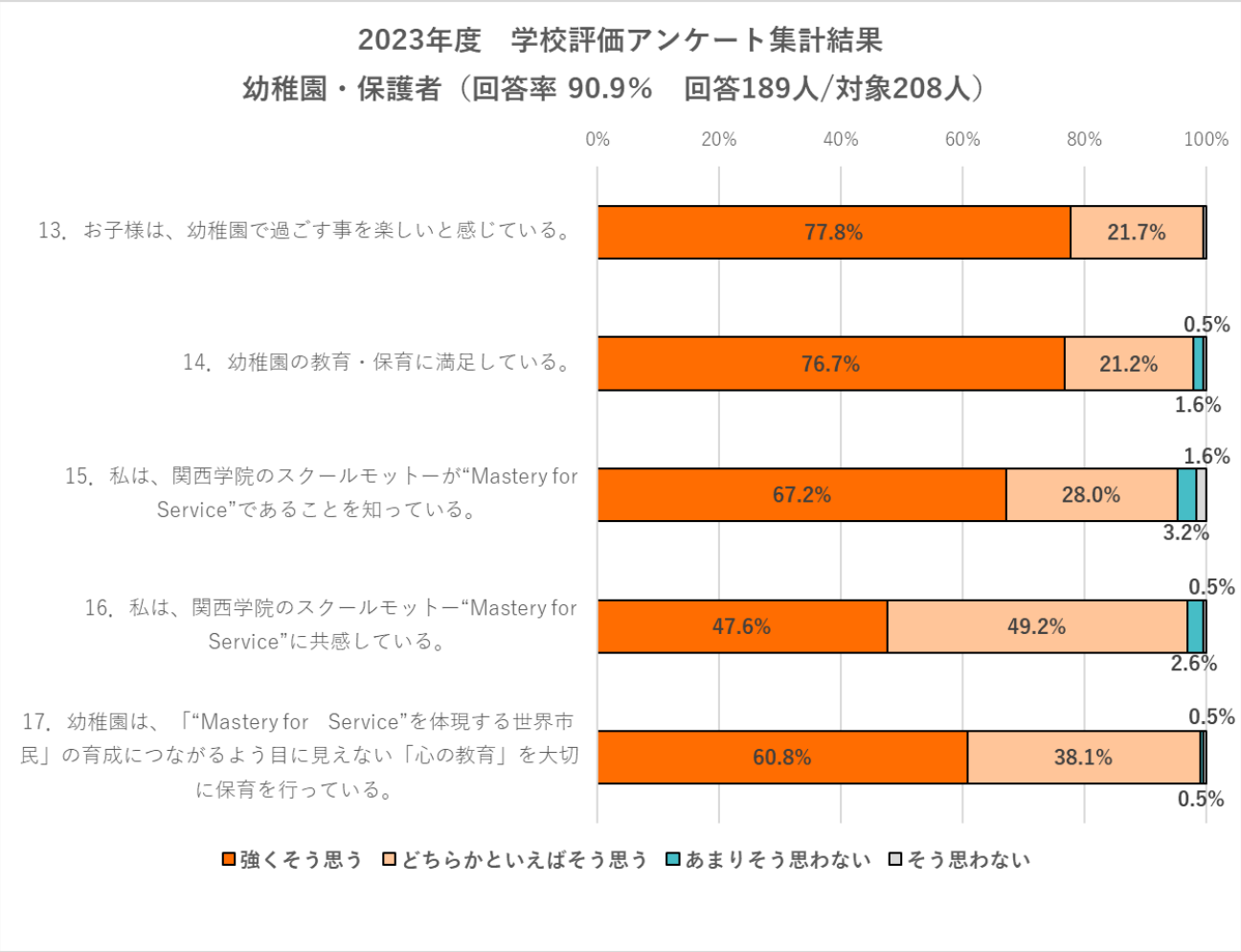
教員アンケートは、全体的に前年度より自己評価が低く、保育に携わる姿勢を真摯に問いかけた結果だと思われます。問 15「教員は向上心を持って幼稚園に勤めている」は、「強くそう思う」の割合が過去 3 年にわたり年々低下しています（73.3%→68.8%→57.1%）。問 9「幼稚園は、教員の教育・研究の為の環境（学会・研修会への参加も含む）づくりに努めている」も「強くそう思う」「どちらかといえばそう思う」の肯定的回答が前年度より低下し、今年度は全ての質問項目で最も低い数値でした。その結果が、「教育課程・指導」「教育環境整備」の「B」評価に反映していると推察します。教員のニーズやキャリアステージに応じた教育・研修環境を整えていくことが求められます。今後さらに教員間の連携を深め、中・短期の目標を定めるなど具体的な改善策が図られることを期待します。

2023 年度学校評価

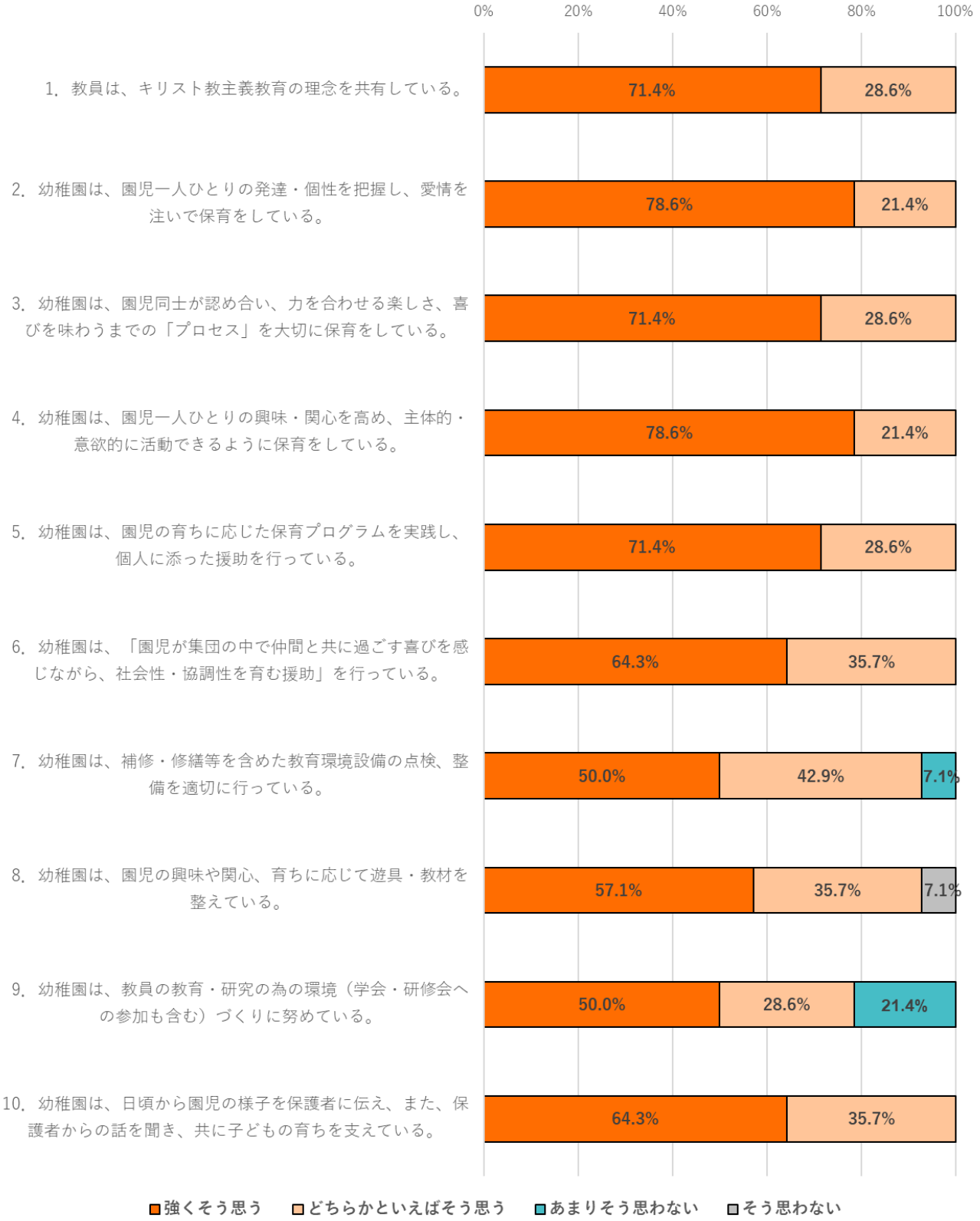
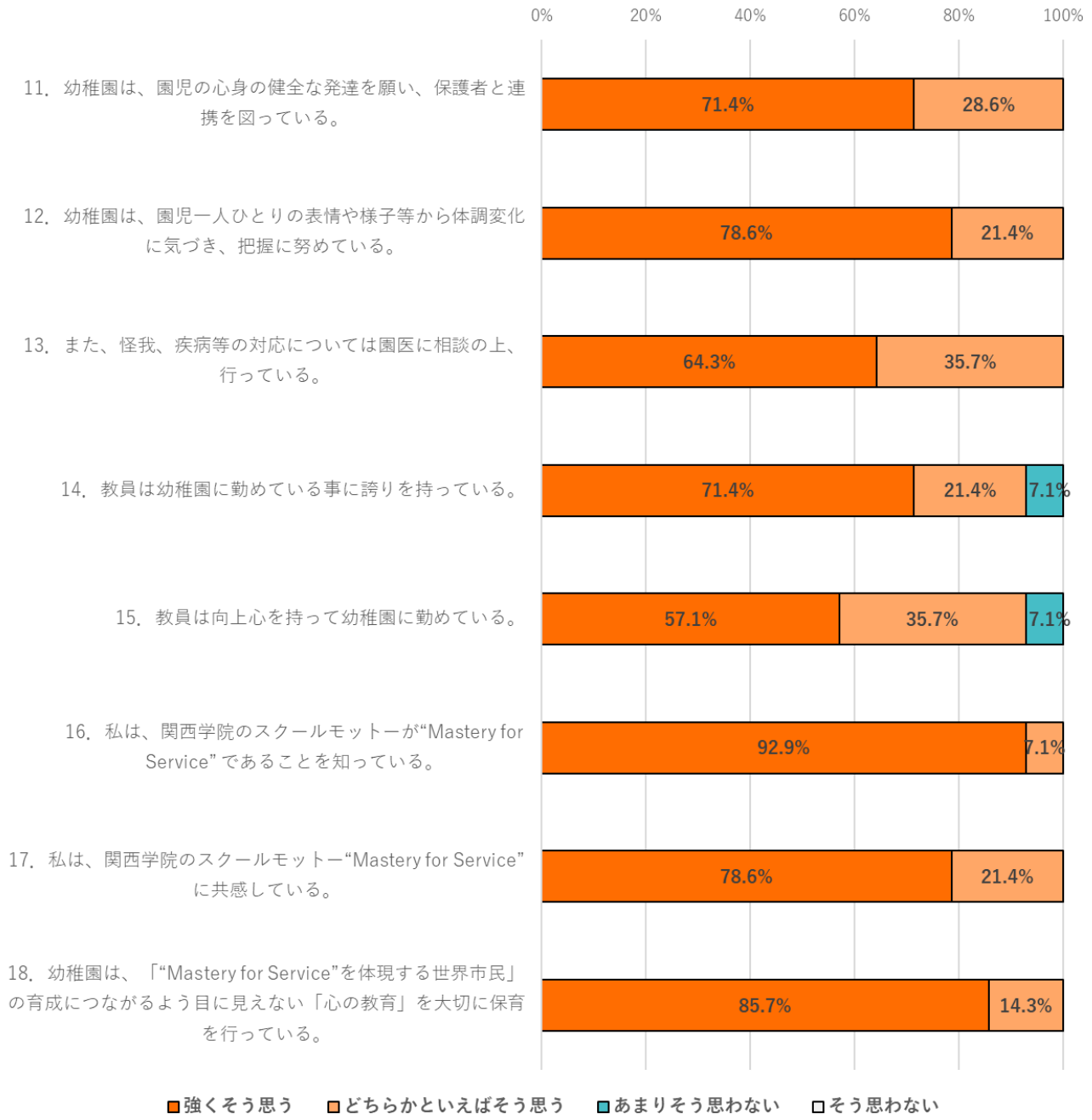
2023年度　学校評価アンケート集計結果

幼稚園・保護者（回答率 90.9%　回答189人/対象208人）




2023年度　学校評価アンケート集計結果
幼稚園・保護者（回答率 90.9%　回答189人/対象208人）
0%
20%
40%
60%
80%
100%
13．お子様は、幼稚園で過ごす事を楽しいと感じている。
77.8%
21.7%
14．幼稚園の教育・保育に満足している。
76.7%
21.2%
0.5%
1.6%
15．私は、関西学院のスクールモットーが“Mastery for Service”であることを知っている。
67.2%
28.0%
1.6%
3.2%
16．私は、関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”に共感している。
47.6%
49.2%
0.5%
2.6%
17．幼稚園は、「“Mastery for　Service”を体現する世界市民」の育成につながるよう目に見えない「心の教育」を大切に保育を行っている。
60.8%
38.1%
0.5%
0.5%
強くそう思う
どちらかといえばそう思う
あまりそう思わない
そう思わない

2023年度　学校評価アンケート集計結果
幼稚園・教員（回答率 100%　回答14人/対象14人）



2023年度　学校評価アンケート集計結果
幼稚園・教員（回答率 100%　回答14人/対象14人）